

わたしとあなた、 そしてみんな

子どもの発達と集団

第11回 あなたがいて、わたしになる



北海道教育大学
小淵隆司

おぶち たかし / 1960年生まれ。千葉県などで発達相談員として長年勤める。著書に『育ちあう発達相談「子どもの発見」を手がかりに』（かもがわ出版）など。

東京都小平市にある放課後等デイサービスのドキュメンタリー映画「ゆうやけ子どもクラブ」をやっと観ることができました。

ヒカリくんは、一人で〇〇線の線路や駅、踏切などをカブラブロックで作っています。横から線路の曲がり具合を確かめながら、つないでいきます。線路は高架にし

ダンス、マイム・マイム」の曲が流れ、ヒカリくんは手拍子をしながら、自分から輪の中に入りました。誘われて入ったのではなく、「ポクもやりたくなくて」輪に入っただけです。その後のすてきなヒカリくんの笑顔が、心に残ります。

ヒカリくんは、線路づくりに夢中で、一見周囲に関心を向けていないようにも見えます。しかし、ていねいに見ているとそうではないことに気づきます。映画の冒頭でヒカリくんは、「マイム・マイム」の曲がかかると、ラジカセが載せてある机の上に座って、声を出して一緒に歌っている場面があります。その後の映像では、曲がかかると、部屋の隅で指導員が大好きな路線と駅名を書いてくれた小さなノートを見ながら、にんまりしています。確かに一人で見ていますが、だからと言って一人ぼっちで楽しんでいるのでしょうか？ ヒカリくんは、大好きな路線と駅名を見ながら「マイム・マイム」のリズムを楽しんでいるとも考えられます。踊らないけど、リズムを感じているようにも見え、時おり踊っているみんなをチラチラ見ているヒカリくんの姿をカメラはとらえています。

たり、立体的にも配置し、踏切や改札など細部まで精巧に作ります。線路をつなぎ終えたあとは、積み木を数個手にして、床に打ち付けて、車輪がレールをまたぐ時に出る「ダダンダダンッ、ダダンダダンッ、ダダンダダンッ」という音を、はじめはゆっくり、そして次第にスピードをあげ、走る電車の走行音をリアルに再現します。今日のおやつを決める時に、自分の意見



「大好きな路線を書いてくれた指導員とのやりとり、マイム・マイム」のリズムや踊っているみんなの声、その状況のなかでヒカリくんは楽しんでいる」と考えることの妥当性を問い直すことが大切です。

仲間のなかにいること

「周囲に関心がある、ない」ということを、私たちはなにによってどのように判断しているのでしょうか。「一緒に踊らない」ことをもって「周囲への関心がなくて踊っていることは見えていないし、音も聞こえていない」とも、「踊る」とはかぎりません。楽しそうに踊っているみんなの姿を見て、踊らないけど楽しい気が

が採用されなかったからでしょうか、悔しくて大泣きをしているAくん。指導員にもたれかかり、そつと肩を抱かれ、よしよし、してあげています。その傍らで心配そうにみている年下のBくんがいます。さらに、年上のCくんも近くに来て一緒に座って慰めています。聴覚過敏のカンちゃんや、おんぶ大好きのカクくん、そんないろいろな仲間たちと日々生活を一緒に過ごしながら、ヒカリくんは「線路づくりに」をします。

すもつをして遊んでいる場面で、ヒカリくんは、「ハッケヨイ、ノコッタ」の声に合わせて指導員がほかの子どもたちを投げている様子を見えています。それも土俵マツト近くで、「大好きな線路・踏切」を作っている様子を見えています。好きなカブラブロックでもあそびたいし、すもつも気になる、ということなのでしょう。すると、ヒカリくんは、ほかの子が行司の「ノコッタ」の声で投げられるタイミングに合わせて、「ついやっちゃった」という感じで、自分から土俵に入って転がったのです。指導員はヒカリくんをそのまま持ち上げて、「ノコッタ」とマットの上に転がします。ちょっと照れ笑いしているヒカリくんは、なんだかうれしそうです。その後、フオーク

持ちになることもあります。

「マイム・マイム」のチャッチャチャララ……のときのタイミングで、ヒカリくんは輪の中に近づき、一緒に手拍子をしながらかみ始めました。カメラは、そのうれしそうに笑っているヒカリくんをとらえています。まわりで楽しそうに踊っている〇〇くんや指導員の姿を何回も目にするなかで、「おもしろそうだなあ、ポクも一緒にやってみよう、やってみようかなあ」という要求が芽生えたのでしょうか。「こうしたい」「やってみよう」という自分の思いや要求は、仲間（他者）の存在との関係で生まれるのです。「ジブンは（も）」という自己は、「ポク（ワタシ）」ではない、〇〇くん（さん）」という他者や仲間と相対化した関係のなかで認識されます。

この場合の他者は、見ず知らずの誰でもいいという他者ではなく「生活を通して、いろいろな空間、時間を共にする仲間」であることが大切です。ゆっくりと時間や空間を共にするなかで、あなたやわたし、そしてわたしたちにつながる「みんな」になつていくのです。その存在が内在化し、かけがえのない「わたし」になるのです。